

が約半分に減少した事実があるにも関わらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。

農地半減「水量そのまゝ」
濃尾用水 東海農政局が水利権主張

濃尾用水の水利権主張が、農地半減にもかかわらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。

濃尾用水の水利権主張が、農地半減にもかかわらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。

農業水利権に敬意払い
都市用水への転用図れ

濃尾用水の水利権主張が、農地半減にもかかわらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。

濃尾用水の水利権主張が、農地半減にもかかわらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。



木曾川の濁水が提起したものは何か

木曾川土地改良区 田島 正典

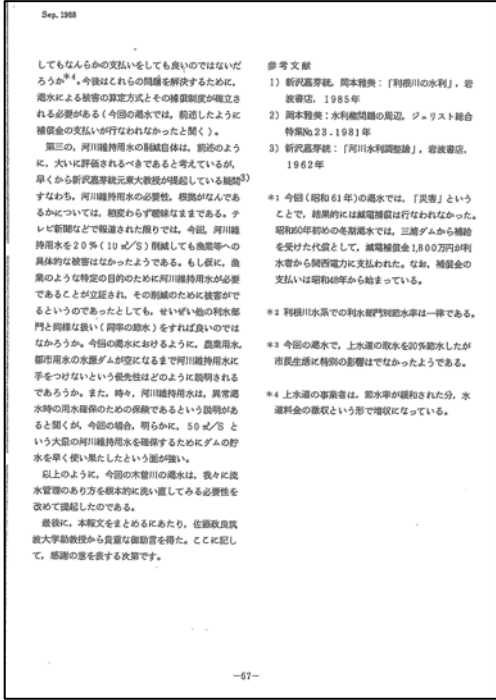
中部地方では、昭和29年以降、次第に濁水が問題になり、水不足が深刻化している。そして、今年も少雨のため、水不足問題が深刻化している。

とりわけ、昭和61年は昭和21年以降最悪の、異常渇水であった。木曾川流域では昭和61年8月から11月の降水量が367mmと当該期間の平均降水量の46%であった。このため、上流のダム貯水率が低下し、電気が不足した。昭和61年9月から、木曾川用水では10月から取水制限が実施された。昭和61年1月まで続いた。

電気が不足した。昭和61年9月から、木曾川用水では10月から取水制限が実施された。昭和61年1月まで続いた。

濃尾用水の水利権主張が、農地半減にもかかわらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。

濃尾用水の水利権主張が、農地半減にもかかわらず、従来の水利権水量がほぼ同様のまま取水されている現状にたいに疑問を生じる。



松原 英臣

- ①長良川の流下する土砂を年間通して（毎月のデータを）正確にとる必要がある。1年で流木が1.5mも埋もれるという報告があったが、どの地点での話か、河床がどのように変化するのが分からない。この話は1年で大量の土砂が川底に堆積することを示唆している。河床地形からもマウンドがどのように形成されるが分かってくる。
- ②平成6年以降に水資源開発公団が実施された「渚プラン」の内容と結果について、説明が欲しい。
- ③塩害について。委員の話で河口堰が建設される以前の農業は遡上する塩水がいつも地下水として存在していた、農地の地下水は元々塩分を含んでいたとする話があった。地盤沈下や台風によって一気に海水に浸ることと違って、地下水位が上昇することで農作物にどんな影響が出るかという話。今までこうした研究は恐らくなかったのではないかと思う。
今回のケースでは堰建設以前の経験や体験をよく調査した上で、新たに実績データが得られれば成果も大きいと思う。